保育者・小学校教諭の子どもの描画過程における模倣に対する意識調査
― 摸倣の位置付けと対処法について ―

奥　　美 佐 子

Ⅰ．はじめに

W・ヴィオラは著書『チゼックの美術術育』に描画過程における子ども間の模倣に関してのＦ・チゼックの考えについて、質疑応答（305の質疑応答中 NO.30同書 p112）形式で以下のように記している。

質問：ひとりの子どもが他の子どもの真似をしても良いか。

答え：否。しかし、ある子どもたちは創造的であるよりは模倣的である。教師及び両親の仕事は、子どもの創造力が弱い強いにかかわらず、ここにおいて創造的な側面を激励することである。もしも、子どもが学校でいつも、隣の子どもの真似ばかりしているときは、先生はたくみにその（ふたりの）子どもたちを離れさせるか、あるいはその模倣的な子に別の題目と別の絵の材料を与えるべきである。[1)]

19世紀の美術教育草創期において、描画過程における模倣に対して、創造性というキーワードを持って模倣を否としたチゼックの考えと対処法をここにみることができる。

筆者は本研究において、子どもの描画過程に出現する子ども間の模倣を情報の摂取という観点で捉え、自己の表現に反映するという意味において、積極的な行為として評価するスタンスで進めている。模倣の過程で、子どもが美的な経験をすることを前稿で明らかにしたが、描画過程における情報摂取が、すべて変形という手続きをとって創造的に、オリジナリティーを感じさせる表現に繋がっているかというと、その限りではない。多義性をもった模倣を現場の保育者及び教育者がどのように捉え、対応しているのかを把握する必要がある。

本稿では子どもの描画過程における模倣の研究の一環として、保育士、幼稚園教諭・小学校教諭の、子どもの描画のプロセスに出現する模倣の捉え方とその対処法について調査することにより、保育･教育の場における描画指導の現状を把握し、描画過程における模倣の研究の基礎資料を得ることを目的とする。

Ⅱ．質問紙による調査

1．調査の概要

調査は質問紙によるアンケート、期日は2006年７月～2007年１月、対象は保育所保育士、幼稚園教諭、小学校教諭で、愛知県一宮市並びに福井県敦賀市保育士会、京都市、岐阜市の保育所、浜松市私立幼稚園連盟、愛知県、名古屋市、大阪市、岐阜市私立幼稚園、兵庫県神戸市、岐阜県美濃加茂市の小学校並びに教育委員会に調査協力をいただいた。また、参考として名古屋市Ｎ短期大学保育科1,2年生を対象に保育者養成校に在学する学生の意識調査を行った。

主な質問項目は、

１）描画過程における模倣が見られるか。
２）描画過程における模倣をどのように考えるか。
３）２）で答えた理由は何か。
４）描画過程における模倣に対処したことがあるか。
５）４）の対処方法は何か。

である。なお、学生に対しては２）、３）、５）に対応する項目を設定した。回答数は、質問項目１）については保育所263、幼稚園405名、小学校157名、２）～５）は保育所346、幼幼稚園405、小学校157、合計908、学生は、１年生169、２年生187、合計356、総計1264である。

2．結果と考察

調査の結果、項目１）において、「よくある、みられることがある、特定の子どもにみられる」を含めて、保育所91％、幼稚園99％、小学校94％が描画過程における模倣があると答えた。この種

の模倣が「ない」と答えたのは保育所９％、小学校５％、幼稚園では１％で、描画過程における模倣が特殊な現象ではないと考えることができる。（図１参照）

項目２）では、子どもが絵を描く過程で他の子どもの絵の模倣をすることをどのように考えるかという問いに対して、答えは表２と図１に示した通りである。「よい」「どちらかといえばよい」と肯定的な立場を示したのが、保育所63％、幼稚園39％、小学校25％であり、「よくない」「どちらかといえばよくない」と否定的な立場で答えたのが、保育所20％、幼稚園38％、小学校55％であった。肯定及び否定的な立場は反比例し、在籍する子どもの年齢が低いほど肯定的な回答の割合が多く、年齢が高くなるに従って否定的な回答の割合が高くなった。

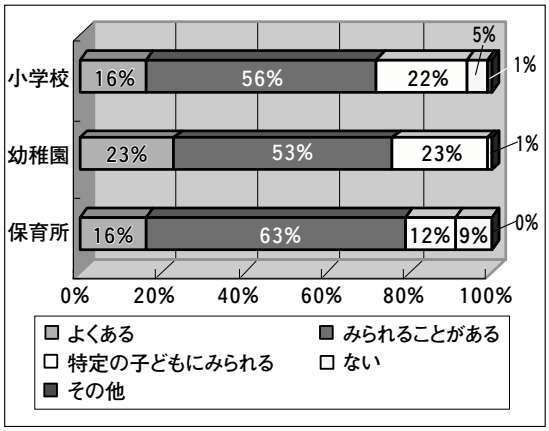

図１　項目１　描画過程における模倣はあるか

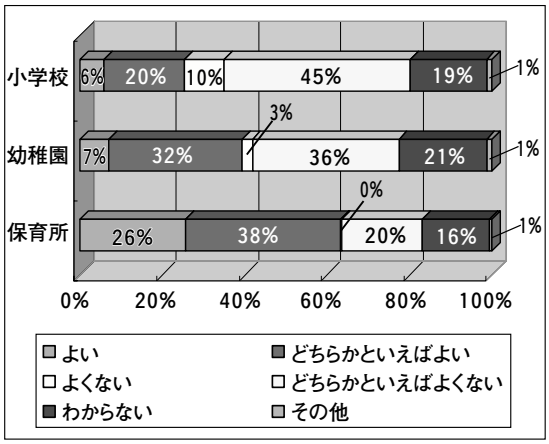

図２　項目２　描画過程における模倣をどのように捉えるか

短期大学1,2年生を対象に、１年はすべての実習前（10月）、２年はすべての実習終了後（11月）に調査を行った結果、両学年とも「よい」「どちらかといえばよい」を合わせて約80％が肯定的な回答をした。保育・教育現場からの回答に比べて飛躍的に高い率を示したと言える。

項目３）については、肯定群と否定群に分けてその理由を聞いた。保育所、幼稚園、小学校とも意見に共通性が見られたので、総合してまとめた。

【肯定群】

- イメージがわかない子や苦手な子が自分で絵を描くきっかけになる。
- 真似ることで描き方を学ぶ。真似ることにより楽しさを味わえる。
- 模倣することでイメージが広がる。
- 子どもの行動は真似から始まる。
- 真似から入ってもその子らしい表現になればいい。
- 毎回模倣や模倣のみで終わるのはよくない。

【否定群】

- 個性や表現力が育たない。
- 自分の発想・表現・想像力を大切にして欲しい。
- 友だちの絵の良いところを取り入れて描くことや表現方法を学ぶのはいいが、全くの真似になるのはいけない。苦手な子は真似をきっかけに描く楽しさを味わえればよい。
- 相互刺激で表現が高まっている場合はよいが、停滞や安心のみの真似はいけない。真似はよくないが、模倣によって刺激を受けたり、イメージを

広げたりするヒントにもなる。

・ イメージの乏しい子は模倣から始まっても、後で自分らしい工夫が出ればよい。

肯定群、否定群ともにまず子どもの状況を現象的に、または発達的に受容した上で模倣のプラス面マイナス面を挙げており、肯定群は模倣を描画の「きっかけ」に、否定群は「創造性」に、視座をおいていると考えられるが、記述の内容は双方が類似している。目標は「その子らしい表現」であり、そこへ至るプロセスで模倣をきっかけとして描き始めること、楽しさを味わうこと、苦手克服、自信回復などの効果を願う姿勢が窺えた。学生の回答は子どもの成長は模倣から始まるから、が圧倒的多数を占めた。

3．調査結果から描画過程における模倣をどう捉えるか

検討の結果、保育所、幼稚園、小学校の子どもの描画過程における模倣は、次のように捉えることができる。

・ 描画過程における模倣は特殊な現象ではない。

・ 模倣を肯定的に捉える割合は、小学校で26%、 幼稚園は39%、保育所は64%の順に増加、否定的な捉え方はその逆を示す。在籍する子どもの年齢がその要因のひとつと考えられる。

・ 肯定群は「描くきっかけ」「経験と学び」に模倣の効果を期待し、否定群は「創造性」「個性」に模倣の弊害を危惧するが、模倣に肯定的な立場でも否定的な立場でも絶対的なものではなく、模倣は個別で両義的である。

項目3)をまとめる過程で、とにかく絵を描いて欲しいという保育者・教育者の切なる願いと、大多数の保育者・教育者は模倣を子どもの側の問題として捉えたことが分かった。回答に「題材の問題」「導入の問題」を挙げて、わからない、どちらかといえばよくないと答えた回答者が何人かあった。子どもの側に模倣の要因がある場合のみならず、保育者・教育者側が作り出した要因をそこに見出す回答があったことを重視するとともに、この回答が少数であったことを憂慮するものである。

次に、項目4)、5)において、この課題への対処法について検討する。

Ⅲ　保育者・教育者の子どもの描画過程における模倣への対処法

1．描画過程における模倣のイメージ

2006年～2007年にかけて行った、保育者、小学校教諭を対象として実施した調査結果から、描画過程における摸倣に対する肯定群は、①よい、②どちらかといえばよいを合わせて、保育所63%、幼稚園39%、小学校25%、否定群は③よくない、④どちらかといえばよくない、を合わせて保育所20%、幼稚園38%、小学校55%であり、3施設の差は明快である。保育所保育士、幼稚園・小学校教諭の子どもの描画過程における模倣に対する捉え方に違いがあることがわかった。子どもの描画過程における模倣を肯定的に捉える割合は、小学校、幼稚園、保育所の順に高く、否定的な意見はその逆順であった。また、この調査では描画過程で模倣が出現した場合の対応についての設問を儲け、対応経験がある保育者・小学校教諭の対応方法について訊いた。

ここでは、描画過程で模倣が出現した場合どのように対処したかという調査項目を中心に扱い、これらの場面での子どもの描画への指導・援助の実情を分析して、保育所、幼稚園、小学校における描画の指導・援助の方法について有効な示唆を得たい。

前節で調査結果から模倣のイメージは対象とする子どもの年齢と関係があり、また時と場合により模倣の位置付けを変える理由や戸惑いが多様に述べられたことから、子どもの描画過程における模倣が多様な解釈がなされるものであると考えられる。この項目の選択枝で「わからない」を選んだ回答者が、保育所16%、幼稚園21%、小学校19%あり、その理由として対象・時と場合による対応の違いについてのコメント付したことも、前述の結果を裏付けるとも考えられる。

設問2)を下敷きにして、次に項目4)及び5)について検討したい。

2．描画過程における模倣への対処

⑴　調査の概要

調査は第Ⅱ章と同様の質問紙によるもので、以下５項目中、本研究では４)、５)の２項目を対象とする。

⑵　調査の結果

①　対処の有無

項目４）の「描画過程における模倣に対処したことがあるか」の問いに対して、対処したことがあると答えたのは、保育所45%、幼稚園72%、小学校71.3%、ないと答えたのは、保育所54%、幼稚園27%、小学校27% あった。（図３）

②　描画過程における模倣の捉え方と対処の関係

設問２における筆者の予想では、摸倣に対しての肯定的意見（①、②）の数値と否定的意見（③、④）の結果を反映した数字がでると予測したが、結果ははるかに摸倣への対処が多いことがわかった。よい・どちらかといえばよいと答えた肯定群で対処したことがあるという答えが保育所・幼稚園の保育者では54%あり、摸倣の肯定群で対処したことがない保育者の45%を上回り、その他が１%であった。また、よくない・どちらかといえばよくないと答えた否定群では、対処したと答えた保育者が75%であった。否定群でも、対処したことがないという回答が23%あり、その他１%となった。（図４参照）

校種別では、保育所での肯定群が対処した割合は43%、対処しない割合が55%、幼稚園で肯定群が対処したのは60%、対処しないが31%であった。本調査で保育士と比較して幼稚園教諭の摸倣に対する捉え方に肯定群が少ないことがわかったが（図５参照）、肯定群でも摸倣への対処を60%がしたことであった。否定群では保育所で62%が対処した、35%が対処しなかった、幼稚園では82%が対処した、17%が対処しなかったとしている。小学校教諭で肯定群が摸倣に対処したのは68%、対処しなかったのは30%、その他２%、否定群で対処したのは76%、しなかったのが22%、その他１%であった。対処の割合は幼稚園と近い。３歳以上を対象とする保育では摸倣への対処が描画指導に組み込まれていることを示しているのではないかと推測するものである。

総体的に以下のように考えられる。

- 摸倣に対して否定的な捉え方をしている保育者・教育者の方が、摸倣に対処する割合が高い。
- 摸倣に対して肯定的、否定的な捉え方が、直接的に対処の割合につながるわけではない。
- 保育所保育士と比較して対処すると答えた割合は、幼稚園教諭のほうが高い。校種別では幼稚園の割合が一番高い。
- 保育所・幼稚園の保育者（全体）に比べて小学校教諭のほうが、対処すると答えた割合が高い。

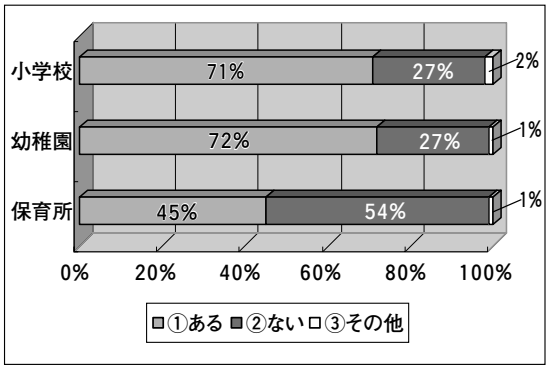

図３　描画過程の模倣に対処したことがあるか

③　対処の方法

子どもの描画過程における模倣への対処の方法については表２にまとめた通りである。保・幼・小ともにA「子ども一人ひとりのイメージを引き出せるよう、その子と一緒に考える」こと、B「励ます・その子らしいところを褒める」を重視していた。C「他の作品や作例を見せる」、「色彩やフォルム、技法などを変化するように指導する」など、直接的な作画の指導も幼稚園・小学校にかなり見られた。また、「子どもにあった題材や素材を工夫する」など指導法やカリキュラムの見直しを指摘したものもある。チゼックの対処法同様にD「席を離す」も多いが、保育所では低年齢児対象に「真似たい子の傍に座らせる」という対処法もあった。これについては、Eに分類し

た。また、Ｂプラス他の対処というケースなど、複数の対応も多い。対処方はＡ～ＤにＥその他を加えて概ね５つの類型に分類できる。（表１参照）

④　保育者･教育者の経験或いは担当年齢（学年）と摸倣に対する考えや対処の有無

次に保育所、幼稚園、小学校の保育者・教育者が担当する年齢・学年による、子どもの描画過程における摸倣に対する捉え方や、対処の有無の相違を調査結果から読み取ることを目的にデータを検討したい。

摸倣に肯定的または否定的な回答をした保育者・教育者の担当年齢および学年との関係を図８～10に示した。保育所、幼稚園ともに担当年齢と回答の関係は明確には出ていないが、小学校では、学年が低いほど摸倣に対して肯定的な回答が多い。

摸倣への対処と保育者・教育者の担当年齢または役職、担当学年の関係について、図12～15に示した。保育所・幼稚園ともに３～５歳児では担当年齢が高くなるほど対処する割合が高くなる傾向がある。保育所における０～２歳児では対処の割合が高いが摸倣を奨励する方向で高いことが設問６の記述からわかり、３歳児以上とは異なる対応をしていることを勘案する必要があろう。園長、主任、フリー、その他の摸倣への対処の割合は高いが、幼稚園の主任の対処の割合が100%であったことは特記しておきたい。小学校では低学年・中学年・高学年に向かって摸倣への対処の割合が低くなっている。子どもの描画の発達段階に対照すると、４・５歳から２、３年生ごろまでは図式的な表現の時期が継続し、10歳～11歳の頃に描画の転換期が来ることから、摸倣への対応が変化しているとも考えられる。摸倣がよく見られる時期についての設問を小学校教諭にした回答では、摸倣は低学年に見られるという割合と、時期は関係ないという割合が高く、時期に関係なく見られ、低学年によく見られるという結果であった。対処が低学年に多いことがこの結果からわかる。

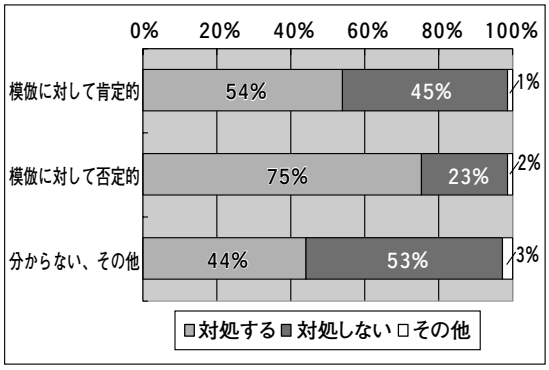

図４　模倣の捉え方と対処の仕方　幼稚園･保育所

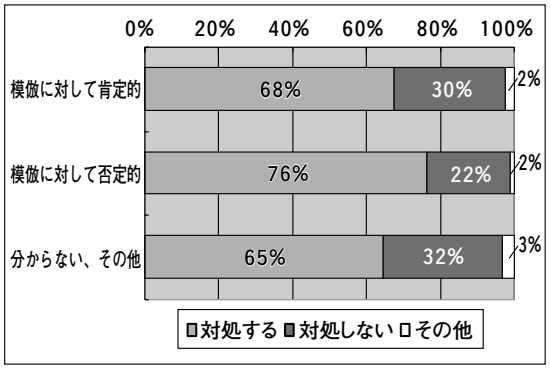

図５　模倣の捉え方と対処の仕方　小学校

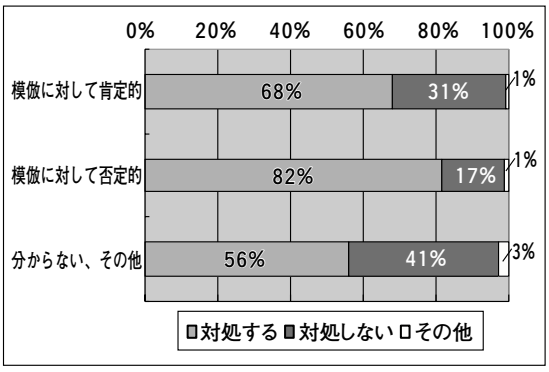

図６　摸倣の捉え方と対処の仕方　幼稚園

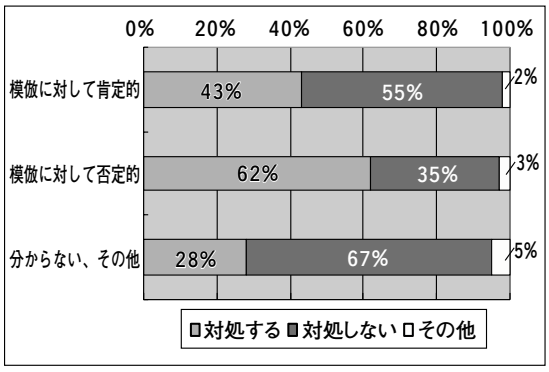

図７　模倣の捉え方と対処の仕方　保育所

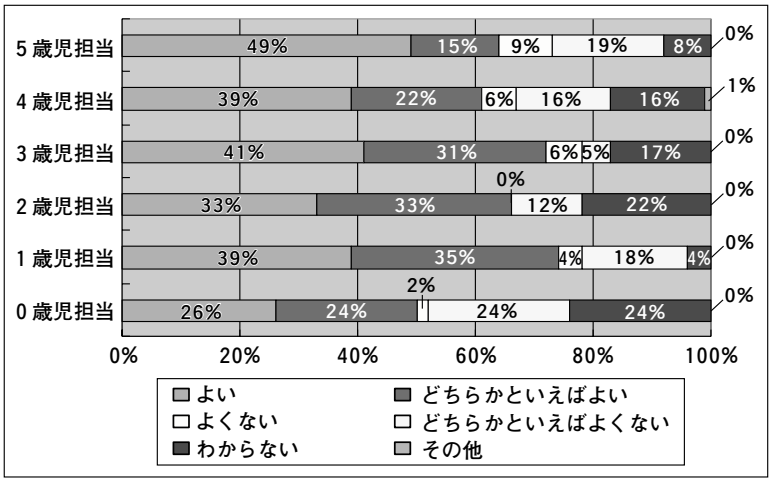

図 8　担当年齢別模倣の捉え方　保育所

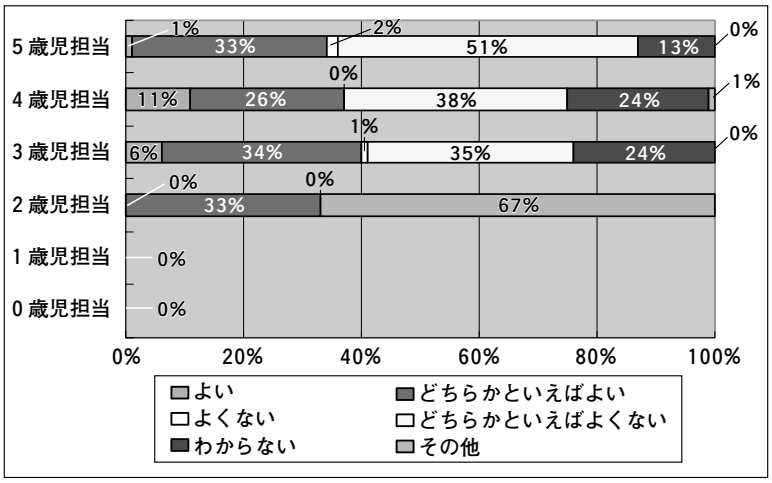

図 9　担当年齢別模倣の捉え方　幼稚園

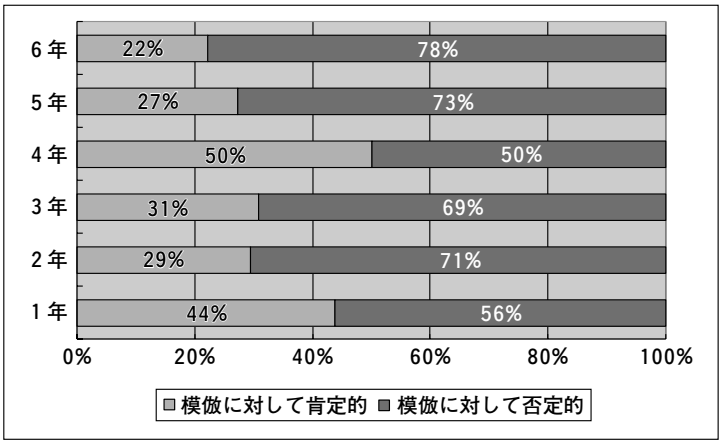

図10　担当学年別模倣の捉え方　小学校

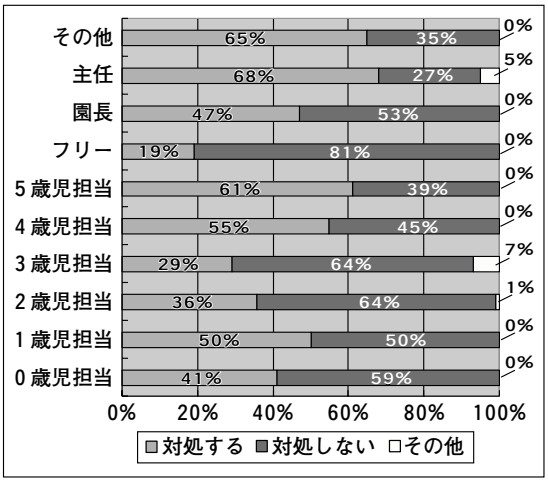

図12　担当年齢別対処　保育所

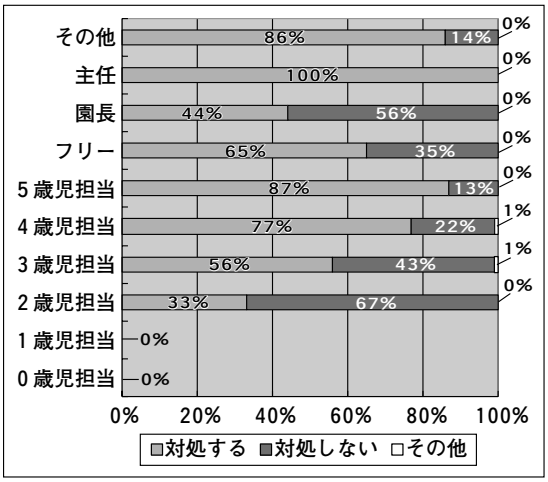

図13　担当年齢別対処　幼稚園

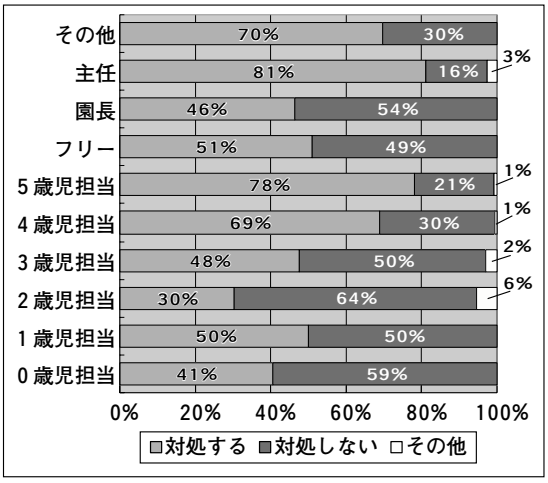

図14　担当年齢別　保育所・幼稚園

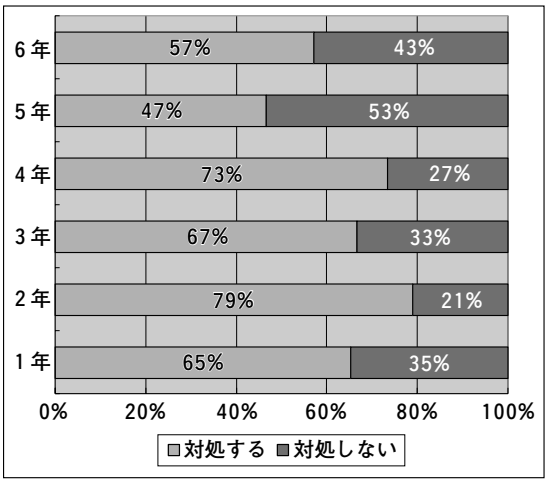

図15　担当学年別　小学校

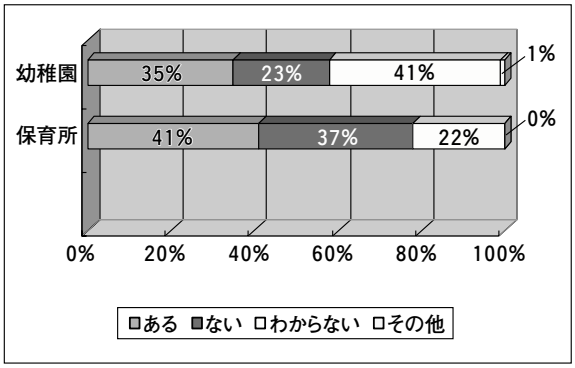

図16　0～2歳児の描画過程に模倣はあるか

表１　保・幼・小における描画過程に出現する模倣への対処の類型

	主な対処の方法と対処の類型（Ａ～Ｅと表示）
保育所	Ａ：なぜ模倣するのかを考え、その子の力になるような対応を心がける。子どもの気持ちに共感し、子どもが興味を持っていることなどに気づかせていく。 Ｂ：描こうとする気持ちを認めながら、少しでも個性が出るように言葉をかける。真似する子どものいいところを見つけて褒め、少しでも自信がつくようにする。 Ｃ：教材の使い方によって楽しく描ける方法を工夫するなどして描く楽しさを味わえるようにする。他児の絵に気づかせ、色々な描き方があることを知らせる。高年齢では一工夫加えるアドバイスをする。 Ｄ：場所を離す。一人で描ける環境をつくる。 Ｅ：模倣したいこと同じ向きにしてあげる。描くことを楽しんでいたので、同じであることを強調した。好きなメンバーで描けるようにする。
幼稚園	Ａ：子どもの相談にのり、イメージがわかなかったり描き方が分からない子などに、一緒に考えてみたり方法を伝えたり、子どもと考えることを大切にしている。 Ｂ：多少でもその子の個性が出ているところを褒め、その子らしさを認める。 Ｃ：導入時に声をかけたり、イメージが広がりやすいようにする。説明したり、色々な例を見せたりする。形は同じでも色だけ変えるよう声をかける。 Ｄ：席を決めておいたり、替えたりする。 Ｅ：周りの子と違っていいと声をかける。
小学校	Ａ：対話をして自分らしさに気づかせ、イメージを広げさせる。その子の話を十分に聞いて、気持ちを引き出す。少しでも独自性があるように。 Ｂ：がんばっているところを褒め、徐々にその子らしさを求めていく。オリジナルの部分を褒める。 Ｃ：子どものイメージが広がるような題材を考え、導入を工夫する。さまざまな表現のバリエーションを示し、自ら選べるようにする。鑑賞を重視し、個々のよさを粘り強く知らせていく。模倣しても、自分のアイディアを加えるように話す。自分の思いを表すよう指導する。構図では模倣になっても、彩色や展開部で変わるよう指導する。 Ｄ：特定のもの同士が模倣している場合は席を離す。 Ｅ：自信を持って描いてよい、人と違ってよいと声をかける。真似られることを嫌がる子がいる。

⑶　子どもの描画過程における模倣への対処の状況

対処に関わる調査結果からは次のことが言える。

- 子どもの描画過程における模倣への対処は、保育者・教育者が摸倣をどのように捉えているかが前提となる。
- 対処をした割合は、幼稚園・小学校・保育所の順であった。幼・小はほぼ同率、保育所の割合の倍近くになる。
- 対処の有無については、摸倣を否定的に捉えている保育者・教育者に摸倣へ対処したと答えた割合が高い。しかし、肯定群に対処した、否定群にも対処しない、の回答があり、摸倣を肯定的に捉えるか否定的に捉えるかは対処の有無に直接的には反映しない。
- 対処の方法は概ね表１に示したＡ～Ｅの５つの類型に分類することができる。
- 対処の有無は、対象児の年齢によって異なる。乳幼児では対象年齢が高いほど対処する割合が高く、小学生では低学年に対処の割合が高く、高学年では低い。
- 対処の方法は年齢・学年に関係なく概ね個別的である。３歳未満児では、対処の内容が摸倣の奨励である場合が見られる。
- 対処の道筋は、摸倣する現実に対峙したとき、子どもの状況から日常の子どもの姿を辿り、それらの情報をもとに対応策が決められる。根底にある該当する子の個別の情報と、その場での該当する子どもの状況を勘案して、５つの類型で示したような対処が取られる。

Ⅳ　結論と課題

1．子どもの描画過程における摸倣の捉え方

保育者・教育者が子どもの描画過程における摸倣に対する考え方は、保育所・幼稚園・小学校と対象児の年齢が高くなるほど、摸倣に対して否定的な回答が多かった。摸倣に対する肯定群と否定群の回答選択の理由に、回答者は肯定群、否定群ともにまず子どもの状況を現象的、発達的に挙げている。次に模倣のプラス面マイナス面を挙げた。肯定群が摸倣を受容する理由の多くは模倣が描画の「きっかけ」や「経験と学び」につながることへの期待である。否定群が摸倣を排除したい理由は「創造性」や「個性」に欠ける表現に陥ることへの危惧である。表現の「きっかけ」あるいは「創造性」に視座をおいているのであるが、記述の内容は双方類似している。目標は「その子らしい表現」であり、そこへ至るプロセスで模倣をきっかけとして描き始めること、楽しさを味わうこと、苦手克服、自信回復などの効果への願いが込められている。

2．対処法の特徴

保育者・教育者の摸倣への対処から読み取れることとして、摸倣の肯定群、否定群ともに子どもの気持ちの受容と励まし、子どもに寄り添いともに考えるという多くの保育者・教育者の模倣へ対処する姿勢が見えた。表現の独創性、個性という視座からはかなり具体的、直接的な技術指導での対処も見えた。対処の５つの類型から見ると、保育所はB「励ます･その子らしいところを褒める」、幼稚園はA「子ども一人ひとりのイメージを引き出せるよう、その子と一緒に考える」、小学校はC「他の作品や作例を見せる」、「色彩やフォルム、技法などを変化するように指導する」「子どもにあった題材や素材を工夫する」の対処が多く見られ、子どもの発達的な傾向とも関連するものであると考えられる。一人の子どもの中で「描く意欲の育成・楽しい表現の経験」と「描画の独創性・個性的な表現」との、本来は等価で共存するはずであるにもかかわらず到達しがたい目標の間で、保育者・教育者の対応のゆらぎが見える。

3．摸倣調査から見た課題

⑴「子どもの育ち」と「創造性」の関係性

子どもの描画過程における模倣を肯定的に捉える保育者・教育者群、否定的に捉える保育者・教育者群ともに、子どもたちの成長を願い、個性的で創造性あふれた表現を目指していることが、調査の記述から読み取れた。模倣を肯定的に捉えるか否定的に捉えるかは、模倣する子どもと模倣の場面によって判断されることが多いと考えられる。回答に「わからない」が多いのもその現れであろう。これらのことから、「子どもの育ち」と「創造性」の関係性についての課題は、保育・教育の時間軸の中で取り組み、解決していかなければならない課題だと言えよう。

⑵「摸倣する子ども像」の打破

子どもの描画過程における摸倣に対する肯定・否定の理由から、保育者・教育者が摸倣する子どもに抱いているイメージを読み取ることができる。肯定群・否定群に共通した回答で、特に肯定群に多く出現した記述が「イメージがわかない子や苦手な子が自分で絵を描くきっかけになる。絵を描くのが苦手な子は真似ることで描き方を学ぶ。」である。真似る子＝絵が苦手な子、描き出せない子、という固定的な子ども像を多くの保育者・教育者が持っていると思えることである。摸倣に対する肯定・否定以前にこの概念を打ち破ることが課題の一つであると考える。

⑶　保育・教育の見直し

小学校教諭の回答に比較的多く出現した対処の類型Ｃには２方向があった。

① 題材・教材の工夫、導入の工夫…保：教材の使い方によって楽しく描ける方法を工夫するなどして描く楽しさを味わえるようにする。幼：導入時に声をかけたり、イメージが広がりやすいようにする。小：子どものイメージが広がるような題材を考え、導入を工夫する。さまざまな表現のバリエーションを示し、自ら選べるようにする。鑑賞を重視し、個々のよさを粘り強く知らせていく。

② 表現のプロセスでの指導、援助　＊言葉がけや提示などの刺激…保:他児の絵に気づかせ、

色々な描き方があることを知らせる。幼：説明したり、色々な例を見せたりする。小：自分のアイディアを加えるように話す。自分の思いを表すよう指導する。＊直接的な指導…保：高年齢では一工夫加えるアドバイスをする。幼：形は同じでも色だけ変えるよう声をかける。小：構図では模倣になっても、彩色や展開部で変わるよう指導する。

保育所・幼稚園・小学校ともに、表現のプロセスでの指導 , 援助に対処が偏っていた。表現開始後子どもに寄り添う対応の必要性、個別の応答の重要性は言うまでもないが、子どもの情報を十分分析して後に題材・教材の工夫、導入の工夫、延いてはカリキュラムの再構築が求められるのではないだろうか。

本調査で浮かび上がった課題である「摸倣する子ども像」の打破が、保育・教育の見直しを方向付けるのではないかと考える。一連の子どもの描画過程における模倣の研究では描画過程における摸倣のイメージの転換を図ることを目的の一つとしていることから、固定化した「摸倣する子ども像」を打破する鍵を見出せるであろう。新たな保育・教育における指導法やカリキュラム構築への道を開くことを期待する。

謝辞

本研究の調査にあたり、総計1264名から回答をいただいた。回答率は100%で、本文中に書かせていただいた地域の保育士会、幼稚園連盟、教育委員会、調査を快く引き受けていただいた各地の保育士、幼稚園教諭、小学校教諭の皆様、そして勤務校保育科在学生のおかげだと感謝する。

福井県敦賀市清明保育園園長岩崎由紀子先生、岐阜県各務ヶ原市長森幼稚園園長足利静子先生、岐阜県美濃加茂市教育委員会西尾正樹先生、兵庫県神戸市本山南小学校請田留美子先生には特にお力添えをいただいたことに謝意を表する。

【註および引用文献】

1）W・ヴィオラ著　久保貞次郎、深田尚彦訳『チゼックの美術術育』黎明書房　1999 p112

Attitude Survey of Imitation in Drawing Process of Child those who Childcare Person and Elementary School Teacher

―As for the Location and the Action Method of the Imitation―

Oku, Misako*

本研究は保育所、幼稚園、小学校の保育者及び教諭を対象に質問紙による調査を行った結果を分析した結果を中心として構成したものである。

保育者・教育者、保育者養成校の学生が子どもの描画過程における模倣をどのように捉えているのかについて検討し、保育者・教育者が模倣に描くイメージを確認するとともに、校種別に模倣の捉え方を比較検討した。次に保育者・教育者の子どもの描画過程における模倣への対処について、対処の有無、模倣について肯定的な捉え方をする保育者・教育者の模倣への対処の有無とその方法、同様に模倣に対して否定的な捉え方をする保育者・教育者の模倣への対処の有無とその方法について検討し、模倣の捉え方を再確認するとともに、模倣への対処を５つの類型に分類して、保育者・教育者が子どもの「描画過程における模倣」から、どのような指導法を見出しているのかについて考察した。最後に子どもの描画過程における摸倣の捉え方とその対処法の特徴から、子どもの育ちと創造性の関係についての確認、保育者・教育者が「摸倣する子ども像」に一定の概念的な型をもってみる傾向にありこれを打破する必要があること、模倣を子どもの側の問題とした一方的な見方をするのではなく、保育・教育の方法あるいは造形カリキュラムの見直しをする方向へ対処法のシフトを振る必要性を提案した。

キーワード：子どもの絵，描画における模倣，描画の指導法，まね，模倣と創造

**Nagoya Ryujo (St. Mary's) College*